

光文社文庫

長編推理小説

# 燃えた花嫁

山村<sup>み</sup>美<sup>さ</sup>紗



光 文 社



光文社文庫

長編推理小説

燃えた花嫁

著者 やまむらみさ 山村美紗

---

昭和60年7月15日 初版1刷発行  
昭和62年3月5日 7刷発行

発行者 大坪昌夫  
印刷 堀内印刷  
製本 明泉堂製本

---

発行所 株式会社 光文社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13  
電話 東京 03(942)2241(代表)  
振替 東京 6-115347

---

© Misa Yamamura 1985

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。  
ISBN4-334-70176-0 Printed in Japan

光文社文庫

長編推理小説

燃えた花嫁

山村美紗

光文社



「燃えた花嫁」 目次

目次

第一章	南禅寺の死体	7
第二章	華やかな殺人	30
第三章	コースターの謎 <small>なぞ</small>	60
第四章	容疑者のアリバイ	88
第五章	結婚式の惨劇	105
第六章	解けない密室	125
第七章	競争者 <small>ライバル</small>	143

第八章 新しい犠牲者

第九章 作られた炎

第十章 デザイナーの自殺

第十一章 疑わしき遺書

第十二章 ローマ字の秘密

第十三章 秘ひそやかな出逢あい

第十四章 最後のショー

解説

鮎川あしかわ哲也てつや





## 第一章 南禅寺の死体

### 1

浜口は、中門を抜けると、南禅寺の境内に入って行った。

前日の雨が、嘘のように晴れた日である。

あふれるばかりの緑なのに、そよとの風もなく、じつとりと蒸し暑い。盆地のせいかな、京都の夏には風の恩恵というものがない。

京都に生まれ、大学に行くまで京都に育った浜口は、京都の四季は、それぞれに好きだが、それでも、夏だけは、過ぎしにくいと思うことがある。

浜口は、現在京南大学の政治学の助教授で、北白川のマンションに一人住まいである。

まだ、午前九時を過ぎたばかりだというのに、真昼の酷暑を予想させるような暑さがあり、裏山の蟬たちが、やかましく鳴き始めていた。境内には入れるが、拝観時間は十時からなので、参詣の人影は、まだ、まばらである。

浜口は、歩きながら、二年ぶりに会うキャサリンの姿を探していた。

昨夜おそく、突然、電話がかかって来たのである。

「私よ。キャサリン」

といわれたときには、てっきりアメリカからの国際電話かと思ったのだが、

「明日の午前九時半に、NANZENZIでお会いしたいの、どうかしら？」と、いきなりきかれて、驚いた。

「NANZENZIって、どこですか？」

ときき返すと、キャサリンは、明るい笑い声をあげた。

「ナンゼンジといえば、京都のお寺に決まってるわ」

「え、南禅寺のこと？　じゃあ、京都に来るんですか？」

「今日、大阪空港に着いて、今は、雅<sup>みやび</sup>ホテルにいるの」

「連絡してくれば、空港まで迎えに行ったのに」

「イチローを驚かそうと思って」

「充分に驚きましたよ」

浜口一郎は、受話器を持ったまま、笑ってしまった。

こんな行動性は、いかにも、キャサリンらしいと思ったからである。

横で、ふいに、フラッシュを焚<sup>た</sup>かれて、浜口が、眼を向けると、五、六メートル離れた場所<sup>フロント</sup>で、金髪の若い女性が、こちらに向かつてカメラを構えていた。

その女性は、もう一度、シャッターをおしてから、カメラをおろした。

「ハロー、ミスター・ハマグチ」

「ミス・キャサリン？」

「イエス」

キャサリンは、笑いながら、近づいてきた。

二年ぶりに会うキャサリンは、一瞬、別人のように大人びて見えたのだが、近寄ってじっくり見ると、やはり、あのキャサリンだった。可愛らしくて、ジョークが好きで、頭がよくて、冒険好きのあのキャサリンである。

二年前、キャサリンは、まだ、大学生だった。大学を卒業したあと、マスコミ関係の仕事に ついたと聞いていたのだが……。

そういえば、今日のキャサリンは、肩もあらわなタンクトップにパンツスタイルで、プロ用の大型カメラを二台と、重そうなバッグをさげている。

「持ちましよう」

と、素早く、バッグに手を伸ばしてから、

「今回は、何の用で京都へ？」

浜口がきいた。

「今日、午後六時から、雅ホテルでファッション・ショーがあるの。その取材と、京都の写真撮影」

「雅ホテルのファッション・ショー？」

「イエス。あなたと、何か関係があるの？」

「実は、僕も、招待されているんですよ」

「オー」

と、キャサリンは、大げさに手を広げた。

「イチローが、ファッション・ショーに関心があるとは知らなかったわ」

「やめてくださいよ」

と、浜口は笑った。

「僕が、招待されているというより、アメリカ大使夫人が、招待されていて、僕は、そのエスコート役です。叔父の線で頼まれたんですよ」

「叔父さんは、もう外務大臣をおやめになったんでしょう？」

「あなたのお父さんが、副大統領を辞められてすぐです。しかし、何となく、政界にとどまっているんです。やはり、あの世界は、叔父にとって、居心地がいいんでしょう」

浜口は、笑った。

「それにしても、ずいぶん朝早く、南禅寺へ来たものですね」

「早朝の南禅寺の写真を撮りたかったの」

キャサリンは、浜口と歩きながら、レンズを交換し、三脚を立てて何枚か写真を撮ったが、そのうちに、

「朝食をホテルでとらなかつたので、お腹がすいちゃったわ」

と、いった。

「それなら、僕が、京都らしい食事を、ご馳走しますよ」

## 2

南禅寺の湯どうふは有名である。

表参道にも、湯どうふを食べさせる店がいくつもあるが、浜口は、南禅寺の山内にある聴松ちようしろう

院に、キャサリンを案内した。

聴松院は、禅寺だが、門のところ、「湯どうふ」の看板がかかっていて、庭に面した座敷や縁側で、湯どうふを食べさせてくれる。きれいに掃き清められた前庭に入っていくと、着物姿の女性が、

「おいでやす」

と、迎えてくれる。

ここは、昔なつかしい瀬戸物の七輪に、炭火である。

開け放された庭には、松や石にかこまれた池があつて、その向こうに、東山連峰が借景になつている。

土鍋に、とうふとユバ、シイタケ、野菜が入れられ、天麩羅がはこばれてくる。

すでに、二度も来日しているので、キャサリンの箸さばきは、馴れたものである。

「私のお友だちが、日本人に教わつて、自宅で、おとうふを作つてるの」

と、キャサリンが、楽しそうに、箸を使いながらいった。

「自然食品の一つというわけですか？」

「太らないですむ完全食品としてだわ」

「なるほど。日本でも、とうふが、見直されているんです」

浜口はうなずいてから、ふと、冗談口調になった。

「キャシイ、あなたが来ると、よく事件が起きましたねえ。お花の家元が殺されたり、百人一首にからんだ殺人が起きたり……」

「今度は、大丈夫よ。京都の写真撮るのと、ファッション・ショーを取材に来ただけだから」

「あなたが、わざわざ取材に来たところをみると、アメリカでも注目しているファッション・ショーということですか？」

「今度、日本で発明された新しい人工皮革によるファッション・ショーだわ」

「人工皮革というと、私は、靴とか、靴かばんしか思い浮かびませんが……」  
浜口がいうと、キャサリンは、

「とんでもない時代遅れだわ。靴や、鞆に使われる人工皮革は、簡単にいうと一枚の皮を薄く引き伸ばすようにして製造するので、通気性やしなやかさが違うわ。衣料用の人工皮革は、繊維のように細い人工皮革の糸を織って作るの。これによって、繊維業界は、不況から脱ぬけだせるんじゃないかといわれているのよ」

と、顔を紅潮させていった。

繊維業界は、新しい化学繊維の発見によって、大きくなってきた。

最初の大きなステップは、ナイロンの発明だった。ナイロンは、アメリカで発明されたものだが、日本の繊維会社は、そのパテントを買って、量産し、大きくなった。

ビニロンの発明は、日本である。この発明によって、不況にあえいでいた会社は、大きく成長した。

そして、絹の靴下がナイロン・ストッキングに代わり、木綿のブラウスが化繊のそれに代わってしまった。

しかし、世界的な不況や、発展途上国の追い上げによって、繊維業界は、再び青息吐息だといわれている。

その繊維業界が、次の新しいものとして注目したのが、人工皮革だった。

最初に、人工皮革の製造に手をつけたのは、西ドイツのポルシェである。日本でも、同じ方法で製造されたことがある。しかし、寒さに弱く、温度が下がると硬くなり、すぐ、ひび割れして、使いものにならず、各国とも、手を引いてしまった。売れないからである。日本でも、クラリーノの名前で、売り出されたが、売れずに、在庫が山積みになったという。

しかし、今度、日進繊維が、「シャレード」の名前で、開発し、販売する衣料用の人工皮革は、今までの人工皮革の概念を全く変えてしまったものだった。

部厚く、かたく、ごわごわしているというイメージは、全くない。本物と同じ肌ざわりを持ちながら、しかも、どこまでも薄くでき、日進繊維が宣伝文句に使ったいい方をすれば、「絹のように、しなやか」なのである。

人工なので、紙のように薄くもできるが、それでは、レザーの感触がなくなるので、わざと、ある程度の厚みを持たせてある。手で布を逆撫でするとすっと色の変わる皮と同じバックスキンの効果もできるし、光沢も思いのままである。さらに、本物の皮より軽く、染色は自由自在である。雨にも強く、手入れも楽である。

人工皮革は、靴や鞆の時代から、ファッションの時代に入ったのだ。

繊維業界が、過去、ナイロンや、テトロンの発見によって、不況を脱したように、新しい人工皮革に、大きな期待がかけられている。

この「シャレード」に、注目しているのは、日本の繊維業界だけではなく。ヨーロッパやアメリカの業界も注目し、世界的なファッション・デザイナーたちも、ファッションの新しい素材としての「シャレード」に注目し始めていた。

キャサリンは、そうしたことを熱っぽく、浜口に話した。

「アメリカが、注目しているのは、中国市場のことが、頭にあるからじゃないかな」

浜口がいうと、キャサリンは、大きくうなずいて、

「さすがに、世界情勢にくわしい政治学の教授ね」

「まだ、助教授ですよ」

と、浜口は、笑ったが、新しい人工皮革の市場として、中国を考えるのは、常識だろうと思っただ。

十億近い人口を擁する中国は、いぜんとして、巨大な、魅力的な商品市場である。

「中国人の生活レベルは、まだ低いから、本物の皮製品は買えないけど、安い人工皮革なら、そのうちに買えるようになるかもしれない。中国人の着ている綿入りの冬服は、たしかに暖かいけど、耐久性がないし、ファッションナブルでもないわ。だから、潜在的な皮の需要は高いと思うの。それに対して、シャレードは、最適だと思う。そのうちに、冬の中国に行くと、十億の中国人が、全員、シャレードで作ったジャンパーや、コートを着ているようになるかもしれないわ」

「そういえば、今日のファッション・ショーには、中国大使館の夫人たちも招待されていると聞きましたよ」



聴松院での食事をすませたあと、浜口とキャサリンは、もう一度、南禅寺に引き返した。キャサリンが南禅寺の境内にある水道橋の写真を撮りたいといったからである。

水道橋というのは、水路閣とかめがね橋ともいって、明治のころ、琵琶湖から、京都市内に水を引くために作ったそすい疏水の一部である。

疏水が、南禅寺の境内を流れるので、その部分を、レンガ造りのアーチにし、アーチの上部に溝があつて、そこを疏水が流れている。ローマ帝国時代の水道に似ていて、禅寺の風景と、奇妙なコントラストが面白く、絵ハガキにもなっている。

キャサリンも、京都案内の写真を見て、興味を持ったのだという。

もう一度、中門に入る。法堂に向かうゆるい坂道の左手には、石川五右衛門の「絶景かな、絶景かな」のセリフで有名な三門があるが、今は、修復中だった。

その横を通り、法堂の手前で右に折れると、レンガ造りのめがね橋が見える。

そのアーチの下をくぐり、石段をのぼると、めがね橋の上を琵琶湖の水が勢いよく流れているのが見られるのだが、さっきとは変わり今は石段の下に、通行止めのロープが張られ、制服姿の警官が立っていた。

「何か事件らしいですよ」

と、浜口が、キャサリンを見ると、彼女は困ったような顔をした。

「そうらしいけど、絶対に私のせいじゃないわ」